慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若林眞教授 略年譜· 主要論文· 著訳書一覧
Sub Title	Biographical resume and list ofpublications
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.13- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林眞両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若林　眞教授　略年譜・主要論文・著訳書一覧

略年譜、主要論文・著訳書一覧

昭和四年　四月三日、新潟県佐渡郡両津町に生まれる。

昭和十七年　四月、新潟県立佐渡中学校（旧制）に入学。

昭和二二年　三月、同校卒業。

昭和二三年　四月、慶應義塾大学文学部予科（旧制）に入学。同級に田久保英夫がいて親交を結ぶ。彼はジェイムズ・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』などに読みふける寡黙な青年であった。その頃、ひそかに創作家を志す。

昭和二四年　四月、慶應義塾大学文学部（新制）に入学。

昭和二五年　四月、仏文学専攻課程に進学、佐藤朔教授、白井浩司助教授を中心とする同課程はフランス戦後文学の研究と紹介の日本のメッカと目されていて、潑剌の気がみなぎっていた。『三田文学』四月号の新人特集に短編小説「一塊の砂糖」が選ばれる。この頃より山川方夫、桂芳久等との文学的交流が始まる。また、毎週水曜日に新宿の紀伊国屋書店喫茶部で催されていた三田文学水曜会に山川、桂等と参加するようになる。原民喜、堀田善衛、柴田錬三郎氏等の諸先輩、さらに若い世代の先輩安岡章太郎氏や遠藤周作氏（渡仏直前の）や、東大出身の吉行淳之介氏等にお会いしたのも、この会合の席上であった。十二月、文学部自治会誌『文林』第9号に短編「車窓」が選ばれる。同号に同じく掲載された「バンドの休暇」は山川方夫

の処女作である。続いて次年度の同誌に「海の誘い」が選ばれ、山川の「安南の王子」が評判になる。

昭和二六年　九月、桂、山川、田久保等と語らい、桂の知り合いの東大生、広島大生などを誘って、同人誌『文学共和国』を創刊する。中編小説「多忙な土曜日」が『文学界』の同人雑誌評で、山本健吉氏の認めるところとなる。（同誌は翌年七月の第四号で終刊。）

昭和二七年　『三田文学』七月号に評論「小説の危機について」が新人評論として紹介される。

昭和二八年　『三田文学』三月号より山川、田久保、桂、林（峻一郎）等と編集協力者として同誌の編集に参画する。三月、仏文学専攻課程を卒業。卒業論文は「フランソワ・モーリヤックと現代小説の問題」と題して佐藤朔教授に提出。同論文の骨子は同年の『三田文学』六、七月号に「現代小説の問題――F・モーリヤックをめぐって――」と題して分載される。　昭和二九年　四月、大学院文学研究科仏文学専攻修士課程入学。同年秋、奥野健男、吉本隆明、服部達、遠藤周作、清岡卓行、日野啓三、村松剛等が創刊した『現代評論』に同人として参加、同誌第二号に「アンドレ・ジイド論」を発表。

昭和三〇年　九月、関東学院大学経済学部非常勤講師（仏語担当、三二年三月まで）。

昭和三一年　三月、修士課程卒業、文学修士。修士論文は佐藤朔教授へ提出の「アンドレ・ジイドにおける小説の生成と発展の研究」。四月、大学院文学研究科博士課程入学、同課程の創設第一回生となる。慶應義塾大学文学部副手（専門課程）に任用される。

昭和三二年　四月、慶應義塾外国語学校非常勤講師（仏語担当、昭和三八年三月まで）となる。十月、ジョルジュ・バタイユの小説『蠱惑の夜（原題C・神父）』の翻訳が講談社から出版される。画家の岡本太郎氏が「ジョル

ジュ・バタイユの思い出」と題する情熱的な序文を寄せてくれた本書は、私の最初の訳書であると同時に、わが国におけるバタイユ紹介と翻訳の嚆矢となる。

昭和三四年　三月、大学院博士課程終了、満期退学。四月、文学部助手（専門課程）に昇任。九月、遠藤周作氏の跡を襲って文化学院非常勤講師（仏語、仏文学担当、昭和四一年三月まで）となる。

昭和三五年　五月、ピエール・クロソウスキーの小説『ナントの勅令破棄』、『ロベルトは今夜』を遠藤周作氏との共訳で河出書房新社より刊行する。フランス版「鍵」と喧伝された本書がわが国におけるクロソウスキー紹介と翻訳の嚆矢となる。

昭和三六年　四月、文学部専任講師（専門課程）に昇任。

昭和三八年　丸谷才一、篠田一士、橋本一明、中山公男、川村二郎、菅野昭正、清水徹、高松雄一、永川玲二等による「文学グループ秩序」に参加、『秩序』六三年夏期号に「出られないドア――「うまのすず草」――」と題するアンドレ・ジッドの『パリュード』論を発表する。

昭和三九年　二月、第二回慶應義塾福澤基金海外派遣留学生として、フランス郵船ラオス号にて渡航。船旅を選んだのは明治以降の西洋留学生の伝統的コースを辿ってみたかったからである。東西文明の距離を実感する。約一月後にマルセーユ港に着き、列車ミストラル号でパリに向かう。パリ大学ソルボンヌ校その他の教育機関で聴講する傍ら、アンドレ・ジッドにゆかりの地を歴訪し資料を蒐集する。パリ滞在中、ピエール・クロソウスキー、アンリ・トマ、ミシェル・ビュトール氏等の知遇を得る。

昭和四〇年　二月十七日、パリのオルリィ空港から日航機で帰国の途につく。機中にて、帰国後に山川方夫と交わすは

ずの戦闘的会話を想像裡で組み立てていた。二月二十日にその山川は仕事場のあった神奈川県二宮町の国道上で輪禍に遭い、嘱望された新進作家としての活躍がまさに始まろうとしていた矢先に、三五歳の生涯を閉じる。これが私の日本再会の初体験になる。四月、文学部助教授に昇任する。立教大学文学部非常勤講師（仏文学特講担当昭和四二年三月まで）となる。十月、学生部副部長（兼任、昭和四二年九月まで）となる。

昭和四四年　七月、東京大学教養学部非常勤講師（仏語、外国文学担当、昭和四六年三月まで）となる。十月、早稲田大学第一文学部非常勤講師（文芸演習担当、昭和四五年三月まで）となる。

昭和四五年　四月、文学部教授（専門課程）に昇任。北里大学医学部非常勤講師（仏語担当、昭和四七年三月まで）となる。

昭和四七年　数年来日本全土を荒れ狂った大学騒動で慶應義塾にも物心両面の荒廃が蔓延し、心身共に疲労困憊した私は自分の職業に虚しさを覚え、そのうえ近年相ついで肉親を失った痛手もあって、一種の精神的危機に見舞われる。その危機を乗り越えるために、久方ぶりに小説の創作に手を初め、『新潮』七月号に長編小説「海を畏れる」を発表（翌年文芸春秋から刊行）する。

昭和四九年　十月、早稲田大学第一文学部非常勤講師（フランス現代文学担当、昭和五一年三月まで）となる。

昭和五二年　四月、大学院文学研究科委員に昇任。十月、慶應義塾女子高等学校長に就任する（兼任、昭和五七年九月まで）。

昭和五五年　十月、慶應義塾理事に就任する（兼任、昭和五七年九月まで）。

昭和六一年　四月、お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師（仏文学特講担当、昭和六三年三月まで）となる。

昭和六三年　十月、ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル『ジル』（国書刊行会昭和六二年刊）により、一九八八年度日本翻訳文化賞を受賞。

平成元年　四月、慶應義塾大学藝文学会委員長となる（慶應義塾常任理事就任に伴い六月辞任）。五月、石川忠雄塾長から慶應義塾常任理事に任命される。渉外、国際交流、役員会を担当することになり、その後四年間、国内国外各地の三田会、海外の諸大学等を歴訪することになる。

平成三年　五月、米国マサチューセッツ工科大学新学長就任式典に塾長代理として出席。

平成四年　三月、タイ王国チュラロンコン大学創立七五周年記念式典に塾長代理として、また日本の大学の代表として、出席し祝辞を述べる。平成五年　五月、石川塾長の退任に伴い、常任理事を退任し文学部教授に復帰する。十月、新設の慶應義塾大学アート・センター所長に就任する（兼任）。

平成七年　三月、大学予科入学から数えて四七年、職を奉じてから三九年の歳月を閲した慶應義塾を、万感の謝意を胸に抱きつつ定年退職することになる。

主要論文

「《テレーズ・デスケルー》から《贋金つかい》へ」（『藝文研究』一九六七年第二十三号）

「ミシェル・ビュトールに寄せて」（中央公論社『文学の可能性』一九六七年）

「若きナルシスの憧憬と苦悩――ジッド初期作品論」（青銅社一九七六年）
「ロマネスクの崩壊――戦後フランス小説三十年」（朝日出版社一九七七年）
「小説発見の小説」（大修館書店『フランス文学講座2小説II』一九七八年）
「『背徳者』の両義性――消去されたテクスト解読の試み」（『藝文研究』一九八二年第四十四号）
「アンドレ・ジッド『田園交響楽』の形成」（『藝文研究』一九八九年第五十四号）

著書

『海を畏れる』（創作小説）（文芸春秋一九七三年）
『絶対者の不在』（フランス文学論集）（第三文明社一九七三年）
『現代フランス文学作家作品事典』（共編、講談社一九八一年）
『二十世紀のフランス文学』（共著、慶應通信一九八三年）

訳書（単行本収録のみ）

アンドレ・ジッド『贋金つかい』（集英社一九九〇年）他十七点
フランソワ・モーリヤック『癩者への接吻』（春秋社一九八七年）他三点

ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル『ジル』（国書刊行会一九八二年）他一点
ジョルジュ・バタイユ『C神父』（二見書房一九七一年）
ピエール・クロソウスキー『歓待の掟』（共訳）（河出書房新社一九八七年）
アラン・ロブグリエ『快楽の館』（河出書房新社一九六九年）
マルグリット・ユルスナール『夢の貨幣』（集英社一九七八年）
アンリ・トマ『岬』（白水社一九六四年）他一点
エレーヌ・シクスス『内部』（新潮社一九六九年）他一点
パトリック・ベッソン『さようなら、友よ』（読売新聞社一九八二年）
ジュリアン・グリーン『クリスチーヌ』（筑摩書房一九六四年）
ジェルメーヌ・ブレ、マーガレット・ギトン共著『小説の時代』（共訳）（紀伊国屋書店一九五九年）
クロード・エドモンド・マニイ『現代フランス小説史』（共訳）（白水社一九六五年）他一点
ジャン・スタロバンスキー『ラシーヌと視線の詩法』（集英社一九六七年）
アルベール・カミュ『ハーマン・メルヴィル』（新潮社一九七三年）他一点
マルセル・アルラン『ドリュ・ラ・ロシェル』（筑摩書房一九七五年）